音声変化の規則性とその例外*)

――ダグル語における円唇母音の「折れ」――

栗　林　　均

「研究紀要」第45号（1993）抜刷
平成５年3.22印刷，平成５年3.30発行
――日本大学人文科学研究所――

音声変化の規則性とその例外*)

——ダグル語における円唇母音の「折れ」——

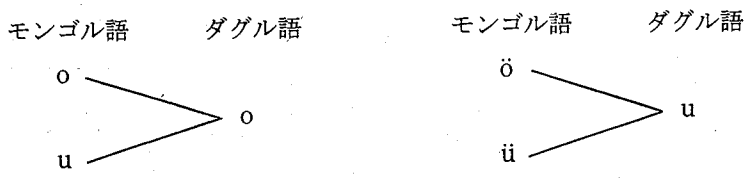
栗林　　均

はじめに

ダグル語はモンゴル系諸言語の中で，比較的古風な特徴を保持している言語として知られる[1]。たとえば，13・14世紀の中世モンゴル語の文献資料に記録されている語頭の無声摩擦喉音（h）は，現代の主要なモンゴル系言語では失われているが，ダグル語では軟口蓋無声摩擦音（x）として保持されている。また，中世モンゴル語の母音連続（hiatus）は，現代のモンゴル語諸方言では融合して長母音が対応しているのに対し，ダグル語ではその一部に二重母音が対応している。このほか，ダグル語の語彙の中には，中世モンゴル語の文献に記録されていて，他の言語や方言ではすでに使われていない単語がいくつか見いだされる。

こうしたことから，N．ポッペは「今日，満州地方のダグル族とアフガニスタンのモゴール族によって，中世モンゴル語が話されている」[2]と書いているが，これは不正確で，誤解を招きやすい表現である。確かに，上に示した特徴に関しては，ダグル語に中世モンゴル語的な特徴が保持されているのは事実である。しかし，それ以外の方面では，ダグル語もまた時間の流れの中で多大な変化を被っており，全体として，ダグル語は中世モンゴル語の言語状態から著しく隔たっているのが実状である。

ダグル語の言語的特徴のひとつとして，この言語における円唇母音の現れを指摘することができる。ハルハ方言やチャハル方言に代表されるモンゴル語は少なくとも4つの円唇母音（o u ö ü）を有するのに対して，ダグル語では円唇母音は2つ（o u）だけである。このうち，モンゴル語のoとuは，多くの場合ダグル語のoに対応しており，モンゴル語のöとüは，通例ダグル語のuに対応している[3]。この対応関係は，次のように図示することができる。



*)この論文は，平成3年度の文部省科学研究費補助金の交付を受けて行った研究の成果の一部である。

ところで，この特徴に関して，モンゴル語とダグル語のどちらがより古い発展段階を反映していると考えられるであろうか？　もし，ダグル語の状態がより古いとすれば，上の対応はひとつの音が2つの音に分裂した変化の結果である。逆に，モンゴル語の状態がより古いとすれば，上の対応は2つの音がひとつの音に融合した変化の結果である。

現在の時点でのわれわれの結論は，モンゴル語の方がより古い発展段階を反映しているというものであるが，これは「音の恣意的な分裂変化を排除する作業原則」を適用して得られる帰結である[4]。それは，ひとつの音が分岐的な変化によって2つ（あるいはそれ以上）の音に分裂するとき，そこには必ず音声的な条件の違いが存在するはずだ，という作業原理である。これに従う限り，ひとつの音が2つ（あるいはそれ以上）の音に分裂したと言うためには，その変化を引き起こした音声的条件の違いを明かにする必要がある。そうした「音声的条件の違い」が示されない限り――上に見たモンゴル語とダグル語の円唇母音の対応がそれにあたるが――1音対2音の対応は，2音が1音に融合した変化であると，みなさざるを得ないことになる。

上に示したモンゴル語とダグル語の円唇母音の対応は，最も一般的なものであって，実際は上の図式に当てはまらない例も少なくない。それは，両言語において，様々な音声的な条件の下で当該の音声変化が妨げられたり，あるいは別の音声変化が生じたり，はたまた借用や類推といった改新的な変化が生じたためと考えられる。

上掲のモンゴル語とダグル語の円唇母音の対応に対して最も大きな「例外」を構成しているのは，モンゴル語の第1音節の円唇母音に対して，ダグル語でϱa あるいはwϱa といった複母音が対応している現象である[5]。N．ポッペは，自著『蒙古語比較研究序説』において，ダグル語における第1音節の円唇母音 *o の発展を次のように定式化している：

「... ダグル語では，単音節の語幹で，語頭の *o はwϱa になった。... *o は後続する音節の *u の前で o のまま残ったが，*a をもつ音節の前ではϱa（語頭ではwϱa）となった[6]。」

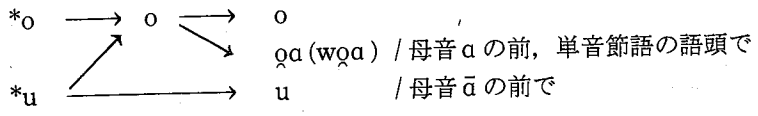
同様に，第1音節の母音 *u に関するポッペの説明は次のとおりである：

「一般に *u は，ダグル語で o に合流した。そして，それゆえ，後続する音節の *a の前ではϱa（語頭でwϱa）として現れ，*u の前では o として現れる。ā が後続する場合，母音 *u は，ダグル語で u のまま残った[7]。」

これによれば，ダグル語では，まず円唇母音の *u が *o に合流する変化が生じ，その後，母音 *o は母音 *a の前でϱa（語頭ではwϱa）に変化したことになる。

上の説明では「母音 *u は，ā が後続する場合，u のままで残った」とあるが，これには2通りの場合が考えられる。ひとつは，ā に先行する *u は *o に合流せずに，u のまま残ったとする見方（*u → u）であり，もうひとつは，*u が *o に合流した後，ā が後続する場合に再度 u に変化したとする考え方（*u → o → u）である。ポッペはこれを母音 *o の発展に関連づけていないことからすれば，前者の場合（*u → u）を想定しているものと考えられる。

これを図示すれば，次のようになる：



この小論では，モンゴル語の第1音節の円唇母音（o, u）に対して，ダグル語でǫa（語頭でwǫa）が対応している現象について，音声変化の規則性と例外の観点からその詳細を検討する。また，これに関連して，ダグル語では，モンゴル語の第1音節の円唇母音のöとüの一部に対しても，wə が対応している現象がある。これらも，上の円唇母音の発展と類似した変化のように見えるが，実際は互いにどのような関係にあるかについても，合わせて検討する。こうした対応関係の中から音声変化の規則性と例外とを分別し，それによってダグル語における円唇母音の発展を跡付けることが，本稿の目的である。

ここでダグル語の資料として利用するのは，1984年に中国内蒙古で公刊された『达斡尔语词汇』である[8)]。これは，中国内蒙古大学蒙古語文研究所のスタッフが1980年に中国内のモンゴル系諸言語・諸方言を対象に行った現地調査に基づくダグル語と中国語との対訳語彙集で，熟語も含めて約7千語が収録されている。現存のダグル語の語彙集の中では最も収録語彙が多く，かつ最も信頼に値する資料である。

様々な錯綜した音声変化を分類・整理するためには，変化を被った元の音の種類と音声的な条件の違いを明確にする必要がある。しかし，「変化を被った元の音」は，当然のことながら，当該の言語には既に存在しない。それを推定する有力な手がかりとなるのは，文献資料をも含めて，より古い発展段階を保持していると考えられる他の同系言語の証言である。モンゴル言語学では，伝統的に，ウイグル式蒙古字で綴るモンゴル文語のローマ字転写形をもってモンゴル語の古い発展段階を代表させることが行われている。しかし，しばしば指摘されるように，モンゴル文語形は13世紀以来今世紀に至るまで各地のモンゴル族によって書き言葉として用いられてきたため，時代的にも地域的にも多様な要素を包含しており，加えて文字言語としての制約から，文字の音価の解釈に問題が残る場合が少なくない。そのため，ここでは，ダグル語のより古い発展段階を推定する手がかりとして，モンゴル文語形と並べてオルドス方言形を示すことにする。オルドス方言は，現代のモンゴル系諸言語・諸方言の中で，例外的に第2音節以降の短母音をよく保持している方言として知られ，この点ではモンゴル文語形と合わせてダグル語の古形を推定する上で重要な証拠を提供している[9)]。

*　　*　　*

さて，ダグル語における第1音節の円唇母音の発展を考察するに際して，変化を被る以前の段階の円唇母音を，次のように仮定して，それぞれの場合を検討していくことにする。

1. *u, *ū, *ui の発展

2. *o, *ō, *oi の発展
3. *ü, *ṻ, *üi の発展
4. *ö, *ō̈ の発展

ここで，星印を付けた形は，ダグル語の，より古い発展段階として推定されるものである。

1. *u, *ū, *ui の発展

1-1. *u の発展

最初に，ダグル語における第1音節の母音*uが被ったひとつの変化を検証しておこう。それは，次のように定式化することができる：

「ダグル語の第1音節の*uは，後続の音節に母音*aがある場合，絶対語頭ではwɑ となり，子音に続く場合には，先行する子音を唇音化して平唇母音のɑに変化した。その際，先行する子音が*bと*mの場合には，それらの子音に影響を及ぼすことなく，母音だけがɑに変化した。」――①

ダグル語では，第2音節以降の短母音が弱化・消失する現象が進んでいるために，ダグル語の語形だけを見ている限り，後続する音節に母音*aが存在していたかどうかを判定することは困難である。オルドス方言形およびモンゴル文語形は，この点に関して，ダグル方言のより古い発展段階を多く反映していると考えられるので，これによって第2音節に母音*aが存在していたかどうかを推定することができる。

①の変化の例を，語頭子音の種類によって分類して示せば，次の通りである[10]。

(1) 絶対語頭

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
wɑkən	uχɑnɑ	uqana, uquna	雄山羊
wɑl	ulɑ	ula	靴底
wɑnə-	unɑ-	una-	倒れる
wɑnt-	untɑ-	unta-	眠る
wɑrən	urɑn	uran	器用な
wɑjin	ujɑn	uyan	柔らかい

(2) d^w-

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
d^wɑnd	dundɑ	dumda	中間
d^wwɑr	durɑ	dura	願い，好み
d^wɑllə-	durɑlɑ-	durala-	好む，愛する

dʷat-	dutɑ-	duta-	不足する

(3) tʷ-

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
tʷald	tulɑ	tulada	為に
tʷas	dusɑ	tusa	利益
tʷasəl-	dusɑlɑ-	tusala-	助ける

(4) sʷ-

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
sʷadəl	sudɑl	sudal	血管
sʷal	sulɑ	sula	緩い，空いた
sʷald-	sulɑd-	sulad-	緩める
sʷar-	surɑ-	sura-	尋ねる

(5) gʷ-

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
gʷanən	ɢunɑ	γunan	(牛, 馬が) 3歳の
gʷandʒin	ɢunɑdži	γunaǰi(n), γunǰi (n)	(雌の) 3歳の
gʷarbə	ɢurwɑ	γurba	三
gʷarbəldʒe:n	ɢurwɑldžin	γurbalǰin	三角形
gʷaj	ɢujɑ	γuya	腿

(6) kʷ-

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
kʷal	χulɑ	qula	葦毛の

(7) xʷ-

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
xʷad	χudɑ	quda	婿の親族
xʷadəl	χudɑl	qudal	嘘
xʷaləɣ	χulɑɢɑ̄	qulaγai	盗賊
xʷar	χurɑ	qura	雨
xʷali:-	ulɑ̄-	ulayi-	赤らむ
xʷark	urɑχɑ	uraqa	投げ縄，罠

(8) dʒʷ-

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
dʒʷal	džulɑ	ǰula	灯明
dʒʷat-	džutɑ-, džudtɑ-	ǰuta-	やせ衰える

(9) b-

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
baʧil-	butšal-	bučal-	沸く
baʤir	budžar	buǰar	汚い
bal-	bula-	bula-	埋める
baləɣ	bulaɢa	bulaγa	貂（てん）
baɣ	buχa	buqa	雄牛
barkən	burχan	burqan	神，仏

(10) m-

ダグル語	ハルハ方言[11]	モンゴル文語	意味
manə	mun	muna	鉄錐（氷を砕く）

なお，次の例も，オルドス方言の第2音節に母音 a が認められ，ダグル語で第1音節の *u が上の例と同じ変化を被っている。しかし，これらを上の例に含めなかったのは，ダグル語の第2音節以降に長母音 a: があるためである。これらは，長母音 a: が後続する他の例と合わせて，後で検討することにする。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
t^{w}ala:n	tula	tula	為
x^{w}arkla:-	uraχala-	uraqala-	罠にかける
g^{w}arbəlʤla:-	ɢurwaldžila-?[12]	γurbalǰila-?	飛び跳ねる
baʧilγa:-	butšal-	bučalγa-	沸かす
barγa:s	burɢasu	burγasu	柳
manəda:-	mund- (kh.)[13]	munada-	氷に穴をあける

次に，ダグル語で「後続の音節に母音 *a が存在しない場合」に，第1音節の母音 *u がどのように発展しているかをみることにする。以下に列挙するのは，オルドス方言やモンゴル文語で第2音節の母音だけが異なるような最小対語（minimal pair）となっているもの，およびそれに近い構造をもつ語を対比させたものである。

(1) 後続する音節の母音が *u の場合と *a の場合の対照

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
onu-	unu-	unu-	（馬に）乗る
wanə-	una-	una-	倒れる

bol	bulu	bulu	穀（こしき）
bal-	bulɑ-	bula-	埋める
boɣʷ	buɢu	buγu	鹿
bɑɣ	buχɑ	buqa	雄牛
goi-	ɢuɟ-	γuyu-, γuyi-	乞う
gʷɑj	ɢujɑ	γuya	腿
dos-	dus-	dusu-	滴る
tʷɑs	dusɑ	tusa	利益

(2) 後続する音節の母音が *i の場合と *a の場合の対照

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
gotʃ	ɢutši	γuči (n)	三十
gʷɑrbə	ɢurwɑ	γurba	三

(3) 単音節の場合と，母音 *a が後続する場合の対照

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
sor-	sur-	sur-	学ぶ
sʷɑr-	surɑ-	sura-	尋ねる
sonə-	sun-, suŋ-	sun-, sung-	伸びる

上の例では，後続する音節の母音が *u，*i の場合にも，後続する母音がない（単音節の）場合にも，すべてダグル語の第１音節には母音 o が現れている。ダグル語において，第１音節の母音 *u が o に変化した現象は，特定の音声的な条件によるものではなく，自生的な変化としてとらえることができる。

*　　*　　*

ところで，①の変化は，第１音節の母音 *u が，後続する母音 *a に「同化」した現象である。その際，第１音節の円唇母音 *u は「ɑ になる」と同時に，その「円唇的特徴」は完全に失われたわけではなく，ɑ に先行する位置に移行している。つまり，絶対語頭においては両唇音の w が生じており，それ以外の位置では先行する子音が「唇音化」している。語頭子音が *b と *m の場合には，これら自体が両唇音であることから，「円唇的特徴」はこれらの子音に吸収されたものと考えられる。

この現象は，モンゴル語史でよく知られた，いわゆる「*i の折れ」と非常によく似ている。「折れ（Brechung, breaking)」の術語は，元来インド・ヨーロッパ比較言語学で用いられていたもので，「単母音が二重母音化する」変化を指す。モンゴル語の「*i の折れ」は，第１音節の母音 *i が，後続する音節の母音に同化する現象であるが，その同化のしかたは，母音 *i

の「二重母音化」としてとらえられ，G.J.ラムステットによって「折れ」の名称が与えられた[14]。

「*i の折れ」の諸相については，すでに別の箇所で論じたが[15]，その典型的なタイプは，母音*iが後続の音節の母音に同化するとともに，その「口蓋音的特徴」を，同化した音の前に移行させるものである。たとえば，第1音節の母音*iは，後続する音節に母音*aがある場合，それに同化してαになると同時に，その「口蓋音的特徴」をαに先行する位置に移行して，絶対語頭では硬口蓋子音jを伴い（*imaγan → jαmā「山羊」），それ以外の位置では先行する子音を口蓋化した（*mingγa → mʲȧŋɢă「千」）。その際，語頭子音が*ǰ, *č, *š等，もともと硬口蓋音である場合には，「口蓋音的特徴」はそれらに吸収され，第1音節には母音αだけが現れている（*činar → tšαnăr「性質」）。（例は，いずれもハルハ方言のもの。）

要するに，「*iの折れ」では，第1音節の前舌狭母音の*iが後続の母音に同化する際に，その「口蓋音的特徴」が分離され，語頭位置に保持されている。同様に，①の変化では，後舌狭母音の*uが，後続する母音*aに同化し，「円唇的特徴」が分離され，語頭位置に保持されている。これらは，個々に独立した別個の音変化でありながら，変化のタイプとしては極めて似通っていることは注目に値する。

*　　*　　*

ダグル語の①の変化の主要な「例外」を構成しているのは，後続する音節に長母音α:がある場合である。すなわち，後続する音節に長母音α:がある場合，①の変化は妨げられ，第1音節の*uは，uとして現れている。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
ukα:	uχᵘā	uqaγan	知識
ulα:	ulā	ulaγa	駅馬
bulγα:r	bulαɢā̄r	buliγar, bulγari	ロシア革
budα:	budā	budaγa	飯
dulα:n	dulān	dulaγan	暖かい
dutα:-	dutā-	dutaγa-	逃げる
gutα:r	ɢutuɢār	γutaγar	第三の
xulα:n	ulān	ulaγan	赤い
xujα:-	ujā-	uya-	繋ぐ
ʤuʤα:n	džudžān	ǰuǰaγan	厚い
bulα:r	bulαk	bulaγ	泉
tuγnα:	tūlɢα	tuγulγa	鉛
gurα:n	ɢur (kh.)「のろ鹿」	γura「のろ鹿」	雄犬
xumpα:-	umb- (kh.)	umba-	泳ぐ

上のすべての語で，ダグル語の第1音節の母音はuであり，しかも第2音節に長母音ɑ:が存在している。「*u→wɑ, ɑの変化が，長母音ɑ:の前で起こらなかった」という事実を確認するには，オルドス方言形やモンゴル文語形を参照するまでもなく，ダグル語の例を見るだけで十分である。(なお，ダグル語の第2音節の長母音に対して，オルドス方言では最後の4例で短母音が対応しているが，これはダグル語の長母音の中に，起源的に異なる種類のものが含まれていることを伺わせる。)

上に述べたことをまとめると，ダグル語における第1音節の円唇狭母音*uの発展は，次のように示すことができる。

*u →	wɑ, ɑ	/ *aの前で
*u →	u	/ ɑ:の前で
*u →	o	/ それ以外で

この節の残りの部分では，これらの変化の例外的な現れを検討する。

例外の第1として，ダグル語で，後続する音節に長母音ɑ:を有するものの，①の変化が妨げられずに，第1音節の母音が後続の母音に同化しているものがある。次の例は，すでに言及したものであるが，「長母音ɑ:が後続しているという」条件の下にありながら，第1音節の母音*uが後続の母音に同化してɑとなっている。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
bɑtʃilɣɑ:-	butšɑl-	bučalγa-	沸かす
mɑnəɑ:-	munəd- (kh.)	munada-	氷に穴をあける
x^wɑrklɑ:-	urɑχɑlɑ-	uraqala-	罠にかける
g^wɑrbəldʒlɑ:-	ɢurwɑldžilɑ-?	γurbalǰila-?	飛び跳ねる
t^wɑlɑ:n	tulɑ	tula	為
bɑrɣɑ:s	burɢɑsu	burγasu	柳

上の語では，第2音節（あるいは第3音節）に長母音ɑ:があることから，第1音節にはuが期待されるところである。それにも関わらず，これらの語で，第1音節の母音がɑに同化しているのは，どのように解釈するべきであろうか？

これらのうち，bɑtʃilɣɑ:-「沸かす」，mɑnəɑ:-「氷に穴をあける」，x^wɑrklɑ:-「罠にかける」，g^wɑrbəldʒlɑ:-「飛び跳ねる」は，それぞれbɑtʃil-「沸く」，mɑnə「鉄錐（氷を砕く）」，x^wɑrk「投げ縄，罠」，g^wɑrbəldʒe:n「三角形」といった語形に動詞形成接尾辞(-ɣɑ:-, -dɑ:-, -lɑ:-）がついたものである。これから推定すれば，これらの語で，すでに第1音節の母音がɑに変化した後，長母音ɑ:を含む接尾辞がついたものと考えられる。

また，t^wɑlɑ:n「為」は，*t^wɑl「為」に再帰所属語尾-ɑ:nが付着した形と考えられ，これ

も，tula → t^{w}al の変化の後で形成されたものであろう。

一方，ダグル語のbarɣa:s「柳」（モンゴル文語形burγasu）という形は，語幹と接尾辞とに分けて説明することは困難である。内モンゴルのバーリン方言やカラチン方言に，barga:s「柳」という形が見られるので[16]，第1音節に母音aを持つ形はこうした内モンゴルの方言から借用した可能性がある。

例外の第2として，ダグル語で第2音節に長母音a:をもちながら，第1音節にuではなく，oが現れている語がある：

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
doska:-	dusā-	dusuγa-	滴らせる
sorɣa:-	surɢa-	surγa-	教える
sondla:-	sundala-	sundala-	馬に二人乗りする

最初の2語（doska:-, sorɣa:-）は，動詞dos-「滴る」，およびsor-「学ぶ」に，それぞれ他動詞形成の接尾辞-ka:-, -ɣa:-をつけて形成されたものであり，第1音節の母音の変化（*u → o）に際しては，後続の音節に長母音は存在していなかったものと推定できる[17]。

最後の例（sondla:-）については，やはり内モンゴルの方言からの借用形である可能性が考えられる。

例外の第3としては，ダグル語の第1音節にwa, aが現れているが，①の変化として扱うには，なお疑わしい部分が存在するものである。次の語では，ダグル語の第1音節にwa, aが現れているが，後続する音節に母音*aがあったかどうか，疑わしい。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
ward	urda, urida	urida, uridu	昔
watʃir-	utšira-	učira-, učara-	出会う
watʃir	utšir	učir, učar	機会
n^{w}aɣəs	nuɢus, nuɢusu	nuγusu	野鴨

最初の語の対応では，オルドス方言にurdaという形も見られることから，第2音節の母音は*aであった可能性もある。ただし，オルドス方言にはuridaという形もあるので，第2音節には母音*iが存在した可能性もある。その場合，uridaもutšira-も，第2音節に母音iをもち，第3音節に母音aがあることから，*u-*i-*aという母音の並びで，まず第2音節の母音*iが*aに同化し，その後で①の変化が生じたと推定することもできる。

次に，ダグル語watʃir（機会）に対応するモンゴル文語形としては，učirと並んで，učarという形も見られる[18]。ダグル語の祖形が*učarであるとすれば，watʃirは①の規則的な音

変化の結果として期待される形そのものである。しかし，オルドス方言形はutširであり，第2音節に母音*aの存在を裏づける他の方言資料も見いだせない。中世モンゴル語の資料『華夷譯語』においてもučirとあり，第2音節の母音はiである[19]。こうしたことから，モンゴル文語形のučar自体が，比較的新しい時代に作られた形である可能性が大きい。ダグル語の祖形が*učarであった可能性も否定することはできないが，wɑʧirの語頭のwɑ-は，①の変化によるものではなく，なんらかの別の原因によって生じた可能性がある。

ダグル語nʷɑɣəs「野鴨」に対して，オルドス方言でnuɢus, nuɢusuと，第2音節に母音uが見られる。この第1音節の母音がダグル語の古い形を反映しているとすれば，ダグル語のnʷɑɣəsの第1音節の母音は，後続する母音*uの前で*u→ɑの変化を受けた極めて特殊な例ということになる。しかし，中世モンゴル語の資料である『華夷譯語』(noqosun) および『元朝秘史』(noḫosu) では，第1音節，第2音節の母音ともoである[20]。このように，第1音節と第2音節の母音が*oであったとすれば，後述するように，「*oの変化」の中にその類例を見いだすことができる (2-1.を参照)。

例外の第4としては，オルドス方言の語形からすれば，第1音節に*uをもち，後続する音節に母音*aが含まれていたと推定されるものの，ダグル語の第1音節にはwɑ, ɑが現れていないものがある。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
ʤol	džulā̄	ǰulai	ひよめき
soɣui	suwā̄	subai	不妊の

オルドス方言形とモンゴル文語形から，これらの語の第2音節に推定されるのは二重母音の*aiであるが，ダグル語の2語はこれに対して斉一な対応をしていない。つまり，オルドス方言のā̄に対して，前者 (ʤol) では，ダグル語に対応する音がないが，後者 (soɣui) では二重母音uiが対応している。

前者では，ダグル語において語末の二重母音*aiが消失したために，第1音節の母音は*u→oの自生的な変化を被ったものと考えられる。

後者では，ダグル語のより古い段階として，第1音節に*oがあったと推定する (*soγai～*sobai) か，第2音節に*uiが存在した (*suγui～*subui) という可能性が考えられる。

「祖形の違い」という同様の推定は，次の場合にも成り立つ。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
xoɽ-	χurɑ-	qura-	会合する
xoril	χurɑl	qural	会議

上の語では，ダグル語の子音ɽが口蓋化子音であること，および第2音節に母音iがあることから，ダグル語の祖形として推定されるのは，第2音節に母音*iをもつ形（*quri-, *quril）である。これは，オルドス方言の祖形として推定される形（*qura-, *qural）とは同一でない。

また，次の3語も，例外の第4に分類されるものであるが，ダグル語とオルドス方言で子音に一部ズレがあることから，それらが同じ祖形を引き継ぐものかどうか疑わしい[21]。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
norɣ^{w}-	nurɑ- ?	nura- ?	倒れる
dors-	durɑd-?	durad-?	言及する
kortʃin	ɢurtšɑ ?「鋭い」	qurča ?	敏捷な

つまり，オルドス方言形はダグル語の古い段階を反映するものではなく，上のダグル語の単語の第2音節には母音*aが含まれていなかった可能性がある。

次の語においても，第1音節の*uは，第2音節の*aに先行していたと考えられるが，ダグル語の第1音節にoが現れている。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
kotʃ	ɢutšɑ	quča	雄羊
kotʃ-	ɢutšɑ-	quča-	吠える

この2語について考えられることは，①の変化に際して，ダグル語の第2音節の母音が*iであったのではないか（*qoči, *qoči-）ということである。

1-2. *ū の発展

ここでは，第1音節の*ūが，wɑ:, ɑ: として現れている場合を中心に，長母音*ūの発展を検討する。

短母音*uの場合と同様，ダグル語の第1音節の長母音*ūは，通例，長母音o: となったが，後続する音節に母音*aがある場合には，「折れ」の変化を被っている。

まず，第1音節の長母音*ūが，o: として現れている例を挙げる：

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
bo:-	bū-	baγu-	降りる
mo:	mū	maγu	悪い
no:-	nū-	niγu-	隠す

jo:	jū̄	yaγu	何
so:	sū	suγu	腋
xo:	χū (kh.)	qau	すべて
ko:l̩	χūli	qauli	法律
no:n	?	nuγun, niγun	少年
ʧo:ɣe:n	tšūgān	čuugiyan	言い争い
etc.			

この変化（*ū → o:）は，特定の音声的な条件によるものではなく，自生的な音声変化と考えられる。

次に，第1音節の長母音 *ū が，後続する音節の母音 *a の前で「折れ」の変化を被っている例を『达斡尔语词汇』の中に求めると，次の通りである。

(1) 絶対語頭

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
wa:ʧ	ūtša	uγuča	仙骨
wa:rəl	ūrak	uγuraγ	初乳

(2) x^w-

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
x^wa:ri:	χ ūrā̄	qaγurai	乾いた
x^wa:l[22]	ula	ula	火口（ほくち）

(3) ʤ^w-

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
ʤ^{w}a:r-	ʤūra-	ǰiγura-	かきまぜる

こうした対応例に対しても，例外が観察される。例外の第1は，オルドス方言の長母音に対して，ダグル語の第1音節に短母音が対応しているものである。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
ʧ^{w}alɣən	tšūlɢan	čiγulγan	集会

オルドス方言のtšūlɢanとモンゴル文語のčiγulγanに対して，ダグル語ではʧ^{w}alɣənという形が見られるが，ダグル語の形は満州語culganからの借用語と考えられる。ダグル語には，上のʧ^{w}alɣənと並んでʧo:lɣa:n（集会）という形もあるが，後者は近代におけるモンゴル語からの借用語である可能性が大きい[23]。

例外の第2として，ダグル語の第1音節のwɑ:が，オルドス方言の短母音に対応しているものがある。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
wɑ:-	uɢ^{u}ā-	ugiya-, ukiya-	洗う

この場合，オルドス方言やモンゴル文語の第2音節頭の子音（ɢ, g, k）に対してダグル語で対応する音がないように見える。これに関する筆者の推定は，母音間の子音gがwに変化したために，それに先行する第1音節の母音uがwに融合した結果得られたものである。

*ugiya- → uɣ^{w}ɑ:- → uwɑ:- → wɑ:-[24)]

例外の第3は，ダグル語の第1音節の母音はɑ:であるが，オルドス方言の第2音節（以降）には母音ɑが認められないものである。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
ʃ^{w}ɑ:ɣ̞-	šūgi-「騒ぐ」	šuugi-「騒ぐ」	風が吹き荒れる

ダグル語の第1音節末の子音が口蓋化子音（ɣ̞）であることからしても，第2音節には母音*iが存在していたと考えられる。これに対しては，母音*iに先行する位置でも*ū → ɑ:の変化が生じたと考えるべきか，あるいは別の原因によるものか，現在のところ結論は保留しておきたい。

また，ダグル語で，後続する音節に長母音ɑ:がある場合に，第1音節の長母音*ūが「折れ」を被っているか否かは興味深いところであるが，『达斡尔语词汇』の中にそのような条件を満たす語を見いだすことはできない。

1-3. *ui の発展

『达斡尔语词汇』の中で，第1音節に*uiをもっていたと推定される語は僅かに数語を数えるに過ぎない。その中で，次の語は，ダグル語の第1音節にwɑiまたはɑiが現れている。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
wɑil-	uᵢ̲lɑ-	ukila-	泣く
s^{w}ɑiɣ	suᵢ̲ɢɑ, suᵢ̲ɢu	suyiqa	よもぎ
x^{w}ɑiɣ	χuᵢ̲χɑ	quyiqa	頭皮

いずれの語においても，オルドス方言の第2音節に母音 ɑ が認められるので，ダグル語においては，第1音節の *ui も，母音 *a の前で「折れ」を被ったものと考えられる。

これにも，例外的な現れが存在する。次の語ではオルドス方言の第2音節に母音 ɑ があるが，ダグル語の第1音節に現れているのは ɑi ではなく oi である。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
goirəntʃ	ɢuirɑntši	γuyirinči	乞食

これに対するひとつの解釈は，ダグル語のより古い段階として，第2音節の母音が *a ではなく，モンゴル文語に見られるように *i であったと考えることである。もうひとつの解釈として，ダグル語の形が内モンゴルの方言からの借用形と考えることもできるが，ここでは両者のいずれとも決定し難い。

以上が，『达斡尔语词汇』の中で，第1音節に *ui をもっていたと推定される語である[25]。

*　　*　　*

以上をまとめると，ダグル語において，第1音節の *u, *ū, *ui は，後続する音節の *a の前で，一様に「折れ」を被っている。*u の「折れ」は，長母音 ɑ: の前で妨げられているが，*ū と *ui の「折れ」も同じ条件で妨げられているかどうかは，条件に該当する例が見いだせないため，明らかでない。

2. *o, *ō, *oi の発展

ここでは，第1音節の母音 *o, *ō, *oi が，ダグル語でどのような変化を被ったかを，母音 *u, *ū, *ui の場合と比較しながら検討する。

オルドス方言では，第1音節の母音が o である場合，第2音節以降の短母音 *a も *u も第1音節の母音 o に同化したため，第2音節以降に現れる短母音は i か o だけである。したがって，この場合には，オルドス方言形は，より古い段階の第2音節以降の母音を推定する際の参考にすることはできず，ここでは主としてモンゴル文語形を手がかりとして利用する[26]。

2-1. *o の発展

ポッペによれば，単音節の語幹における *o は，ダグル語では，絶対語頭で *o → wǫa となり，それ以外の場合，即ち語頭子音に覆われている場合にはこの変化が起こらなかったとしている。しかし，われわれが依拠した資料では，その事実を確かめることはできない。

『达斡尔语词汇』では，「*o を含む単音節の語幹」に合致するものとして次の2語が見いだされる。一方は母音が語頭にあり，他方は子音に覆われているが，ダグル語ではいずれも第1音節に母音 o が現れている。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
ol-[27]	ol-	ol-	得る
bol-	bol-	bol-	成る

次に，多音節の語幹についてみると，ポッペは，「ダグル語では...（第1音節の）*o は，*a をもつ音節の前では ǫa（語頭では wǫa）となり，*u をもつ音節の前では o のまま残った」と書いているように[28]，母音 *u の場合と同じ変化としてとらえている。ポッペによれば，両方が同じ変化を被ったのは，母音 *u が *o に合流してからこの変化が起こったためである。しかし，はたしてこの図式が正しいかどうかを，事実に照しながら検証する必要がある。

まず，次の語は，ポッペの図式に合致する例である。いずれも，第1音節に母音 *o を持ち，後続する音節に母音 *a があったと推定されるもので[29]，ダグル語の第1音節には wɑ，ɑ が現れている。

(1) 絶対語頭

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
wɑlɑn	olon	olan	多くの
wɑld-	oldo-	olda-	手に入る

(2) m-

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
mangələm	?	mongγol amu ?	(糜米)

(3) d^w-

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
d^wɑtər	dotoro	dotura	内部
d^wɑr	doro	doura	下
k^wɑkər-	?	qobqura-	剥がれ落ちる
x^wɑrəm	χormṅ	qormui, qormai	(服の) 裾
x^wɑrəɣ	?	γoruqa, γoriqa	小川

これに対して，ポッペの図式に合致しない対応も少なからず存在する。その第1は，ダグル語の第1音節に wɑ，ɑ が現れているにもかかわらず，後続する音節に母音 *a が存在していたとは考えにくいものである[30]。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
wɑr-	oro-	oru-	入る
g^wɑɣəs	GoGot	γoγud	野生の韮

xʷɑkər	oqor（華）	oqur	短い
sʷɑɣəs	soḫosun（秘）	?	雑魚
kʷɑk	?	qobqu	ばらばらに

次の例も，中世モンゴル語の資料『華夷譯語』や『元朝秘史』に現れる形（noqosu, noḫosun）から，ダグル語のより古い段階として*noγosuという形を推定することができるので，上の対応と同じタイプに属すると考えられる。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
nʷɑɣəs	nuɢus, nuɢusu	nuγusu	野鴨

こうした例をどのように解釈するべきであろうか？「第1音節の母音*oは，母音*aに先行する位置でwɑ, ɑになった」という変化を規則的とみなす立場からすれば，ダグル語の第1音節の母音（wɑ, ɑ）をもとに，第2音節（以降）に母音*aが存在していたにちがいないと推定することもできる[31]。

しかし，そのように断定する前に，なお考慮に入れておくべき別の問題がある。それは，次のように，第1音節の*oに母音*aが後続するにもかかわらず，ダグル語の第1音節に上の変化が生じていない語が少なからず存在することである。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
oldʒ	oldžo	olǰa	戦利品
bod	bodo	boda	大型家畜
torɣʷ	torɢo	torγa	絹
tort-	doɢto-	toγta-	決める
nojin	nojon	noyan	役人
xoir	χojor	qoyar	二
xol	χolo	qola	遠い
dʒoɣʷ-	džowo-	ǰoba-	苦しむ
dʒoblun, dʒoɣʷlun	džowoloŋ	ǰobalang	苦しみ
moɣʷ	moɢ̈n̈	moγai	蛇
noɣʷ	noχ̈n̈	noqai	犬

第1音節の母音*oに対して，ダグル語でwɑ, ɑが対応する語と，oが対応する語とを比較して，その間に音声的な条件の違いを見いだすことは困難なように思われる。「第1音節の母音*oが，母音*aに先行する位置でwɑ, ɑになった」という変化をあくまでも規則的とみな

す立場からすれば，ダグル語の第1音節にoが対応する上の語はすべて例外ということになる。逆に，ダグル語で「第1音節の母音*oが，母音*aに先行する位置でoとして残った」方を規則的な発展とみなすとしたら，こんどはwɑ，ɑを例外として位置づけることになる。いずれにしても，「例外」の数は「規則的な対応」の数に匹敵するほど多く，それらが何故生じたのかを明かにすることは困難である。

ただ，ダグル語において，母音*aに先行する第1音節の*oの発展は，1-1.でみた母音*uの発展とは大いに様相を異にしている，ということだけは確かである。「ダグル語では第1音節の母音*uは*oに合流してから，母音*aの前で*o→wɑ, ɑの変化が起こった」とするポッペの図式によってこのような事実を説明することは，不可能ではないにしても，非常に不自然である。少なくとも，上に示した「例外」に対する説明がつかないままで，この図式を是とすることはできない。現在の時点では，ダグル語の第1音節の*oは，母音*uとは別個に発展を遂げた，とみなすのが穏当な結論であろう。

2-2. *ō の発展

第1音節の*ōに対して，ダグル語では，通例，長母音のo:が対応している[32)]。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
to:, to:n	tō	toγa	数
bo:r	bōs	boγus	(家畜が) はらんだ
bo:s-	bōs-	boγus-	(家畜が) はらむ
xo:ɭ	χōlñ	qaγulai	喉
xo:sun	χōson	qoγusun	空 (から) の
etc.			

これに対して，第1音節の*ōに，ダグル語のɑ:が対応している例を『达斡尔语词汇』の中に求めると，次の通りである。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
t^wɑ:l-	tōlo-	toγala-	数える
t^wɑ:ɖ	tōdok	toγudaγ, tuduγ, tuγuduγ	野雁
t^wɑ:rəl	?	torun ?	ほこり

最初の2例ではモンゴル文語で，後続する音節に母音aが見られる。最後の例については，ダグル語とモンゴル文語形とが共通の祖形に由来するかどうか疑わしいので，ダグル語の祖形として後続する音節に母音*aをもつ形を推定することも可能である (*tōral)。例の数は僅

か3語であるが，いずれも後続する音節に母音 *a をもっていた可能性が大きい。

ところで，次の語では後続する音節に二重母音*ai があったと考えられるが，ダグル語の第1音節には母音 o: が対応している。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
xo:l̥	χōl̈n̄	qaγulai	喉

ダグル語で，二重母音に対応する音が存在しないことからすれば，*ai はこうした変化に先だって消失していたと考えるべきであろう。

2-3. *oi の発展

第1音節の *oi は，ダグル語において oi になったと考えられる。数は少ないが，次はその例である：

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
noir	nȯǫ̈r	noyir	睡眠
moil	mȯǫ̈l	moyil	みざくら

他方，第1音節の *oi に対して，ダグル語で wɑi, ɑi が対応している語としては，次のようなものがある。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
wɑir	ȯǫ̈ro	oyira	近い
wɑirkən	ȯǫ̈roχon, ȯǫ̈rχon	oyiraqan	近い
wɑirt-	ȯǫ̈roto-, ȯǫ̈rotu-	oyiratu-	近付く
x^wɑimɑ:r	χȯǫ̈mūr	qoyimar, qoyimur	上手，上座
x^wɑinə	χȯǫ̈no	qoyina	北，後ろ

モンゴル文語形を参照すれば，これらの語では，いずれも後続する音節に母音 *a が存在していたと推定される。また，これらに対する例外的な現れは，『达斡尔语词汇』の中に見いだせない。

限られた事例であるが，これにより，ダグル語では，第1音節の *oi は，母音 *a に先行する位置で，「折れ」の変化を被ったとみなすことができる。なお，ダグル語 x^wɑimɑ:r では，第2音節に長母音 ɑ: があるが，第1音節の変化は妨げられていない。

*　　*　　*

この節で検討した第1音節の *o, *ō, *oi のうち，長母音 *ō と二重母音 *oi は，母音 *a の前で，*u の場合と同様な「折れ」を被っているとみなすことができる。しかし，短母音 *o は，(1)母音 *a の前で，wɑ, ɑ が対応している，(2)円唇母音の前で，wɑ, ɑ が対応している，(3)母音 *a の前で，o が対応している，という3つの場合があり，規則性と例外の関係が極めて不透明である。

3. *ü, *ū̄, *üi の発展

ここでは，第1音節の母音 *ü, *ū̄, *üi に対して，ダグル語で非円唇母音が対応している場合を中心に検討する。

3-1. *ü の発展

第1音節の母音 *ü に対して，ダグル語では通例 u が対応している[33]。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
undus	ɯndɯs(ɯ)	ündüsü	根
usuɣ^{w}	ɯdžɯk, ɯdzɯk	üsüg「字」	言葉
budu:n	bɯdɯ̄n, bidɯ̄n	büdügün	太い
but-	bɯtɯ-	bütü-	完成する
xund	kɯndɯ	kündü	重い
xus	ɯsɯ	üsü	髪
kutʃ	gɯtši	küčü	力
etc.			

一方，次の語では，第1音節の母音 *ü に対して，ダグル語で wə, ə が対応している。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
wəj	ɯje	üye	関節
wəjil-	ɯjele-	üyele-	折り目をつける
bəs	bɯse	büse	帯，ベルト
bəslə:-	bɯsele-	büsele-	帯をしめる
bəslə:r	bɯselɯ̄r	büselegür	腰回り

オルドス方言形やモンゴル文語形から，第2音節に母音 *e があったことが推定される。これらをもとに，第1音節の母音 *u が，母音 *a の前で wɑ, ɑ となった様に，第1音節の母音 *ü も，母音 *e の前で wə, ə となる「折れ」の変化を被ったと考えるべきであろうか？

しかし，上の5例は，基本的にはwəj「関節」およびbəs「帯，ベルト」という2語に集約される。『达斡尔语词汇』によって，*eに先行する第1音節の母音*uをもつ語の対応を調査すると，多くの場合，第1音節には円唇母音uが現われていることがわかる。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
udʒ-	ɯdži-	üǰe-	見る
udiʃ	ɯdeši「夕方」	üdesi「夕方」	昨日
unun	ɯnen	ünen	真実（の）
but-	bɯte-	büte-	窒息する
xur	ɯre	üre	種
xukur	ɯ^{k}χer	üker	牛
xuns	ɯnes, ɯnisɯ	ünesü	灰
xunuɣ^{w}	ɯnege	ünege	狐
kurul	kɯreŋ, kɯriŋ ?	küreng ? [34]	栗色の
xurɣun	kɯrgen	kürgen	婿
nuɣ^{w}	nɯ^{k}χe, nɯ^{k}χɯ	nüke	穴
suɣ^{w}	sɯ^{k}χe	süke	斧
suɣ^{w}	sɯwe	sübe	隙間
sum	sɯme	süme	寺院
sums	sɯnes, sɯnesɯ	sünesü	霊魂
turɣun	tɯrgen	türgen	速い

これにより，ダグル語では，後続する母音の種類に関わりなく，「第1音節の母音*üはuとなった」という発展を一般的な規則として認めることができる。

ダグル語のwəj「関節」およびbəs「帯，ベルト」の母音が「例外的」な対応であることが分かったが，それがどういう原因で生じたのかを明かにすることは，なお今後の課題として残されている。

3-2. *ū の発展

第1音節の長母音*ūに対して，ダグル語では次の語で長母音u:が対応している。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
dʒu:	džɯ̄	ǰegüü, ǰegün	針
du:r-	dɯ̄r-	dügür-	満ちる

これに対して，第1音節の長母音 *ū に，ダグル語の ə: が対応している例は，『达斡尔语词汇』の中に次の1語が見いだされる。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
gʷə:n	gɯ̄n, gɯn	gün	深い

この単語の第2音節に母音 *e の存在を推定させる材料はない。したがって，この場合の第1音節の母音の変化は，条件変化によるものではなく，3-1.の場合と同様，なんらかの別の原因によるものと考えられる。

3-3.　*üi の発展

第1音節の二重母音 *üi に対して，ダグル語では，次の語で wəi, əi が対応している。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
wəil	ɯile	üile	労働
bəi	bī	bui [35]	有る，居る

第1の語の第2音節には母音 *e が推定されるが，第2の語は単音節である。他方，次の語では，第1音節の二重母音 *üi に対して，ダグル語で二重母音 ui が対応している。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
buil	builɑ [36]	büile	歯茎
guilə:s	gɯiles, gɯilesɯ	güilesü	杏
kuitʃ-	gɯitši-, gɯtši-	güiče-	追い付く
tuimur	tɯimer	tüimer	山火事
kuitun	kɯi̯ten [37]	küiten, küitün	寒い

上の語の全てが，第2音節に母音 *e をもっていたと推定される。これにより，第1音節の二重母音 *üi は，ダグル語で ui として現れるのが一般的であり，wəil, bəi の現れがむしろ例外的であることがわかる。

*　　*　　*

以上，第1音節の母音 *ü, *ū, *üi に対して，ダグル語で非円唇母音が対応している場合を検討したが，それらはいずれも一般的な対応からはずれた例外的な現れであり，後続する音節の平唇母音の影響によって成立したものとは考えられない。この点で，これらの現れは，第1音節の母音 *u, *ū, *ui の発展とは，現象面では類似した面を有するとしても，本質的に

両者は全く異なった変化とみなすべきである。

4. *ö, *ō̄ の発展

二重母音の *öi は第1音節には現れないので，ここでは第1音節の短母音の *ö と，長母音の *ō̄ がダグル語で wə, ə ; wə:, ə: となっている場合を検討する。

4-1. *ö の発展

第1音節の短母音 *ö に対して，ダグル語では，多くの場合，母音 u が対応している[38]。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
ukʷ-	ög-	ög-	与える
kuɻ	köl	köl	足
ut	ɯtɯ	ötü	蛆虫
mur	mörö	mörü	肩
nuɣur	nökχör	nökür	つれ合い
xundur	ɯndɯr	öndür	高い
dutʃ	dötši	döči	四十
ʤuɲ-	džörö-	ǰöri-	逆らう
etc.			

一方，『达斡尔语词汇』の中で，第1音節の *ö に対して，ダグル語で wə, ə が対応している語は次のとおりである。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
wəntʃin	önötšin	önüčin	孤児
bədəŋ	bödönö	büdüne	鶉（うずら）
bəbə:-	bō̄χwīlö-?	bübeyile-?	揺り籠をゆらす
məis	mösɯ	mösü (n), mölsü (n)	氷

中世モンゴル語の資料によれば，最初の語は『元朝秘史』でönečit「孤児（複数）」[39]，2番目の語は『華夷譯語』でbödene「うずら」とあり[40]，ダグル語の第2音節に母音*eがあった可能性もある。しかし，最後の語では，後続する音節に母音*eがあったことを推定する材料はない。しかも，ダグル語の第1音節に現れているのは二重母音の əi である。

これに対して，次の語では，第2音節に母音*eが推定されるが，ダグル語の第1音節には母音 u が現れている。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
kuk^{w}	gö^{k}χö「青」	köke「青」	緑
urkun	öd^{k}χön「濃い」	ödken「濃い」	密な
utul-	ötöl-「老いる」	ötel-「老いる」	(野菜が)木質化する

こうした例からすれば，第1音節の*ö に対して，ダグル語で wə, ə が対応しているのは，後続する母音の影響というよりも，なんらかの別の原因によっているとみるべきであろう。

4-2. *ō̄ の発展

第1音節の長母音*ō̄に対して，ダグル語でwə:, ə: が対応している例は少なくない。『达斡尔语词汇』の中から，該当する例を列挙すれば次の通りである。

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
wə:r	ō̄rīn	öber	自分
wə:d	ō̄dö	ögede	上方へ
bə:lʤ-	bō̄ldži-	bögelǰi-	吐く
t^{w}ə:	tō̄	töge	指尺
t^{w}ə:r-	tō̄rö-	tögeri-	道に迷う
k^{w}ə:m	kō̄mī	kögeme, kögemei	喉
x^{w}ə:	kō̄	kö	煤（すす）
x^{w}ə:-	kō̄-	kögege-	膨らむ，腫れる
x^{w}ə:s	kō̄rsɯ, kō̄rösɯ	kögesü (n)	泡
x^{w}ə:r-	kō̄rö-	kögere-?	吹きこぼれる
ʧ^{w}ə:n	tšō̄n	čögen	少ない
k^{w}ə:rəl-	?	köger-?	自慢する
k^{w}ə:rə:l	?	köger-?	自慢
k^{w}ə:nne:, k^{w}ə:nde:	köndī	köndei	空（から）の
k^{w}ə:l-	köldö-?	köl-	牽く
mə:mə:	?	mömö[41]	娘

ダグル語のt^{w}ə:「指尺」，x^{w}ə:「煤」，ʧ^{w}ə:n「少ない」に対して，オルドス方言でも単音節語が対応しており（tō̄, kō̄, tšō̄n），後続する音節の母音はこの変化に関係していないと考えられる。上の対応例の多さからして，ダグル語では，*ō̄ → wə:, ə: が自生的な音声変化として生じたと考えられる。

これに対して，次のように，第1音節の長母音*ō̄が，ダグル語でu: として現れている語

がある：

ダグル語	オルドス方言	モンゴル文語	意味
bu:s	bös, bösɯ	bögesü	虱
xu:ruɣ^{w}	körgö	kögerge	橋
xu:ruɣ^{w}	körgö	kögerge	ふいご
su:-	sö-	söge-	声がかれる

ダグル語の第1音節で *ȫ → wə:, ə: の変化を被った語と，*ȫ → u: の変化を被った語を比較して，両者の間に「音声的な条件の違い」を見いだすことは困難なように思われる。単純に数の多寡からすれば，ダグル語では *ȫ → wə:, ə: の変化が一般的で，*ȫ → u: の変化はその例外ということになる。

「音声変化の規則性」の原理は，音声変化の例外が生じた原因を解明可能であるとみなしている。本稿では，音声の対応関係を分類し，それに基づいて互いに異なった音声変化を識別した。こうした「例外」の原因の詳細の解明は，今後の研究の課題として残されている。

注

1) ダグル語は，中国東北地方，および一部は新疆ウイグル自治区に居住する約10万人のダグル（达斡尔）族によって話されるモンゴル系の言語である。
ダグル語については，『言語学大辞典』第2巻：世界言語編（中）（三省堂，1989年）中の拙文「ダグル語」(597-603頁）を参照されたい。

2) N. Poppe, *Grammar of Written Mongolian* (Wiesbaden: Otto Harrassowitz. 1954), p. 2.

3) 恩和巴图『达斡尔语和蒙古语』(蒙古语族语言方言研究丛书 004 呼和浩特：内蒙古人民出版社，1988年）33-37頁；50-57頁。

4) A. Meillet, *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes* (Alabama: University of Alabama Press. 1964) p. 472.

5) o̯a および wo̯a に含まれる o̯ は，わたりの母音（glide）を表す。

6) N. Poppe, *Introduction to Mongolian Comparative Studies* (Helsinki: Suomalais-Ugrilainen Seura. 1955) p. 28.

7) Ibid., p. 31.

8) 恩和巴图等编『达斡尔语词汇 (Daγur kelen-ü üges)』(呼和浩特：内蒙古人民出版社，1984)

9) オルドス方言形は，次の資料によるが，表記法を一部簡略化した。
A. Mostaert, *Dictionnaire Ordos* (second édition. New York / London: Johnson Reprint Corporation. 1968)
オルドス方言の言語的特徴については『言語学大辞典』第1巻：世界言語編（上）（三省堂，

1988年）中の拙文「オルドス語」（1096-1099頁）を参照されたい。

10)　以下の例において，ダグル語の表記で d^w, t^w, s^w, g^w, k^w, x^w, $ʤ^w$ 等，子音字の右肩に付した上付きの ^{w} は，当該の子音が円唇的特徴を有する唇音化子音(labialized consonant)であることを表す。ポッペが ɣɑ, wɣɑ と表記しているものは，この表記法では ^{w}ɑ, wɑ に相当する。対応例中の「モンゴル文語」形は，多くの場合，注８）に掲げた『达斡尔语词汇』（1984）によっている。また，「意味」として掲げたのは，ダグル語のそれであるが，ほとんどの場合，オルドス方言とモンゴル文語にも共通である。

11)　オルドス方言の辞典から，これに対応する語を見いだすことができなかったので，ハルハ方言形で補った。文章語の形は мунна であるが，語末の на の綴りは，前舌子音の［n］を表している。なお，ハルハ方言形とモンゴル文語形の意味は「（木の）槌」。

12)　オルドス方言とモンゴル文語形の意味は，ともに「三角形にする」であり，ダグル語の意味と合致しない。このように，語形や意味の対応に疑わしい点があるものには疑問符を付した。（以下同様）
また，語形が完全に対応するものが見いだせない場合には，それに近い形を示したものがある。たとえば，ダグル語の t^wɑlɑ:n, bɑʧilɣɑ:- に対するオルドス方言形の tulɑ, butšɑl- 等。

13)　kh. は「ハルハ方言(khalkha)」の略。対応する形をオルドス方言に見いだせないので，ハルハ方言形を補った。なお，ハルハ方言形とモンゴル文語形の意味は「槌で叩く」。

14)　G. J. Ramstedt, “Das Schriftmongolische und die Urgamundart phonetisch verglichen”, *Journal de la Société Finno-ougrienne* XXI : 2, (Helsingfors, 1902), pp. 45-47.

15)　拙論「『*iの折れ』考—蒙古語における*i音の発展の規則性と不規則性—」『モンゴル研究』（日本モンゴル学会，1981）No. 12, pp. 32-49.,「蒙古語史における『*iの折れ』の問題点」『言語研究』（日本言語学会，1982）第82号，pp. 29-47.等を参照。

16)　孙竹主编『蒙古语族语言词典』（西寧：青海人民出版社，1990）p. 170.
なお，ダグル語では上掲のbudɑ:「飯」とならんで，bɑdɑ:「飯」という形も収録されている。これも，内モンゴルのバーリン方言やカラチン方言ではbɑdɑ:「飯」という形で存在している（上掲書，p. 165）。

17)　他動詞形成の接尾辞-kɑ: -, -ɣɑ:-については，恩和巴图『达斡尔语和蒙古语』(呼和浩特，1988) p. 376 を参照。

18)　F. D. Lessing et al., *Mongolian-English Dictionary,* corrected re-printing (Bloomington: The Mongolia Society, 1982), p. 859.

19)　A. Mostaert, *Le matériel mongol du Houa I I Iu* 華夷譯語 *de Houng-ou (1389)* I (Bruxelles: Institut Belge des Hautes Études Chinoises 1977), p. 104.

20)　Ibid., p. 79.
また，E. Haenisch, *Wörterbuch zu Mangḥol un niuca tobca'an (Yüan-ch'ao Pi-shi) Geheime Geschichte der Mongolen* (Wiesbaden : Franz Steiner Verlag GMBH, 1962), p. 118.

21)　3語のうち，最初の2語では子音が完全に対応しておらず，最後の語では意味にズレが認められる。『达斡尔语词汇』では，それぞれのダグル語の見出しに対して，モンゴル文語形を添えているが，果たしてその対応が適切かどうかを疑ってみる必要がある。

22)　ダグル語 x^wɑ:l「火口」の第１音節の長母音に対して，オルドス方言では短母音が対応してい

るが，これはダグル語において，母音縮合によって生じたものとは別の長母音が存在することを示している。

23) 『达斡尔语词汇』ではダグル語形 ʧoːlɣɑːn に対して，満州語の culgan が添えられているが，筆者はむしろこの形が内モンゴル方言からの借用語であると推定する。

24) 恩和巴图『达斡尔语和蒙古语』(Daγur kele ba mongγol kele)』(呼和浩特，1988) の63ページには，ダグル語の形として uwɑː- 「洗」とあり，この推定の裏付けとなる。

25) モンゴル文語形 bui「有る」，buyila「歯茎」に対応する語は母音 iii のところで取り上げる。後者の語は，陸軍省編纂『蒙古語大辞典・蒙和之部』(復刻，図書刊行会，1971) の848頁を参照。

26) モンゴル文語形では，第2音節以降の円唇母音は，o と u を区別せずに，すべて機械的に u と表記する。

27) ポッペの示している例では，wo̯al-「得る」であるが，これが方言的な違いによるものか，他の理由によるものかは，分からない。

28) 注の6）に同じ。

29) モンゴル文語形で，第2音節，あるいは第3音節に母音字 a が書かれている。

30) 対応例中，(華) は『華夷譯語』を，(秘) は『元朝秘史』を表す。

31) その場合，ダグル語のより古い段階に推定される形は，オルドス方言やモンゴル文語形とは合致しない。

32) 恩和巴图『达斡尔语和蒙古语』(呼和浩特，1988) p. 65f.

33) 同上，p. 51f.

34) 『达斡尔语词汇』では，モンゴル文語形に kürel「青銅」をあてているが，意味が合致しない。ここでは，語末の子音にずれがあるが küreng「褐色の」をあてた。küreng には，küren, kürin という語形もある。

35) モンゴル文語形では，このように男性母音として転写するが，ダグル語の対応から，より古い段階に *büi という形が推定される。

36) オルドス方言では，男性母音が対応している。方言によって，男性母音をもつもの (builɑ) と，女性母音を持つもの (büile) の両方がみられる。

37) オルドス方言には，kɯi̯ten とならんで，kütön, kīten という形もある。

38) 恩和巴图『达斡尔语和蒙古语』(呼和浩特，1988) p. 50f.

39) E. Haenisch, *Wörterbuch zu Mangḫol un niuca tobca'an (Yüan-ch'ao Pi-shi) Geheime Geschichte der Mongolen.* p. 124.

40) A. Mostaert, *Le matériel mongol du Houa I I Iu* 華夷譯語 *de Houng-ou (1389).* p. 43.

41) 内蒙古大学蒙古語文研究室編『蒙汉辞典』(呼和浩特：内蒙古人民出版社，1976) p. 839.